

『縁側』

石塚勝利

8,484 文字

あらすじ:

仕事場で大怪我をした父に代わり、両親の故郷石川まで法要に向かうことになった亮輔は、まだ幼いとこの夏帆を連れて夏の能登半島へ。光と陰、青と緑に彩られる北陸の夏。子供の頃によく遊んだその景色の中、なつかしい祖母の笑顔と変わらない「縁側」に、疲れた亮輔の気持ちはほどけてゆくのだった。

「ねえ亮輔ったら、聞こえてるの？」

まだ明けきらぬ七月の朝に、こんなヒステリックな声で起こされるとは、思いもしなかった。

父の利広が仕事先、建設現場の渡り階段から足を滑らせて、右の大腿骨を折ってしまったらしい。母は何度も「重症」と、スマートフォンの向こうで叫び続けている。「大腿骨骨折」が本当なら、たしかに重症だ。一応「肩書き」も付いてもうすぐ定年を迎えるというのに、すぐに現場に出たがる「厄介者」。きっとそう思われているに違いない。事務所にこもって大人しく机に座っていればいいものを、それがこの様だ。「まったく。もう若くないんだからさ、少しは周りのことも考えろよ」。目の前にいたら、そう言ってやりたい。連日帰宅が「午前様」の亮輔は、鈍く日に焼けた父の顔を思い浮かべては、今日一日をまどろみの中で憂いていた。

そんな父の見舞いか、それとも手術に立ち会えとでも言うのか。ところが母の話は、構えていた言葉とちょっと違って、それまでいい加減に返事をしてきた亮輔が、聞き流せないことを言い出した。途端に半身で起き上がると、高校生の頃から使い続けているベッドは、いきおい深く沈み込み、ギギーッと耳障りな音を立てて軋んだ。そして薄くまどろみながら亮輔は、父と母の生まれ故郷の景色を思い出していた。

亮輔の両親は、二人とも北陸石川の出身だった。母は金沢の旧家のお嬢さんで、農家の次男坊そのままの父を、よく田舎者扱いしていた。金沢にある居酒屋チェーンで知り合った二人が付き合い始めて二年、父が仕事の関係で関東に引っ越す時機を見て、あわてて結婚式を挙げた。盆には必ず帰省して、それは亮輔が生まれてからも続いていたが、父の両親、つまり亮輔の祖父母が相次いで他界してからは、少し足が遠のくようになっていた。それでも幼い亮輔だけは、父と母の郷里石川で過ごす夏が大好きだった。父の兄である義広おじさんと、連れれの里子お婆さんは、祖父母が居なくなった後も同じように父と

母を迎えて、亮輔にも短く眩い北陸の夏を楽しませてくれた。その伯父がくも膜下出血で亡くなってから、六年が過ぎようとしていた。今年はお盆と一緒に七回忌の法要を営むと連絡されていた亮輔の父と母は、早々に金沢行の新幹線チケットを予約していたらしい。父の手術と重なることもあって、その代理を亮輔に頼む電話だった。

「じゃあ、頼んだわよ」

母の頼みはいつも突然で、「No」と言う暇を許さない。「ええっ、マジ無理だって。ちょっと待ってよ」そう言い終わらないうちに、母の声はしなくなっていた。母の横暴さに呆れかえったものの、今回だけは亮輔にとって、そう悪い頼みでもなかった。男も30歳となれば、いろいろと面倒なことが増えてくる。どこかで気分を晴らしたい、そう思っていたところに、眩しい里山の光景が浮かんできた。ただ、ようやく付き合い始めた彼女、前島瑞樹と過ごす時間が消えてしまうのは、いかにももったいない。それだけだった。

同じ職場の瑞樹とは、夏休みに都内のプールで泳ぐ約束をしていた。もちろんそれだけじゃない、しっかりホテルの部屋も予約してある。仕事仲間との約束はどうしてもよかったけれど、彼女との約束をキャンセルするのは、今の亮輔にとってお金以上に惜しいことだった。千葉の県庁所在地で生まれて、そのまま大きくなった瑞樹。両親も同じ千葉のにぎわいの中で生まれ育っていて、彼女には、たとえば夏だけを過ごすようないわゆる故郷はなかった。

金沢から北に延びる国道を逸れると、固く締まった砂浜があった。日本ではここだけ、波打ち際を走ることのできる「なぎさドライブウェイ」を、伯父の車で幾度か通り抜けていた。窓を開け放ち、さざ波の音と一緒に流れ込む潮風が、亮輔の夏だった。そのドライブウェイから海を背に国道を渡れば、今度は緑の海が一面に広がっている。夏には、まだ稲穂よりも緑の葉が青々としていて、その葉を揺らして風の走り抜けていくのが見渡せる広さだ。そして、あふれる陽光の中で、真っ黒な瓦が夏を跳ね返している。冬の烈しい海風から身を守るのだと、義広おじさんはいつも黒い板塀を指の腹でいとおしく撫でていた。瓦屋根には夏の陽が波打ち、垂直にのびる板塀も、強烈な光の陰になってほとんど黒にしか見えない。わずかな白い造りの壁が鎧武者の脇腹のように見えて、

幼い亮輔はいつも怖気づいてしまっていた。

その巨大な鎧武者がギラリと刀を抜いたところで、また目が覚めた。床に転がったスマートフォンが、ブルブルと震えながらジグザグに這っている。ベッドから身を乗り出してスマートフォンを拾い上げ、液晶を見てみると・・・7:32 と白い文字が浮かんでいる。「しまった、二度寝だ」、ベッドから飛び起きて、出窓を隠すカーテンを思いきり右に引っ張る。梅雨が明けたばかりの七月の空は、ビルとビルに切り刻まれながらも、青くて眩しかった。のんびり珈琲を淹れている時間はない。シリアルを箱から適当に皿にあけると、浸した牛乳で一気に口から流し込む。歯ブラシを口にくわえたまま、クローゼットから夢に見ていた黒色のスーツを選び出す。すぐにスーツに身を固めた、隙のないビジネスマンが一人、アパートのドアから出ていった。満員電車にねじこまれて、外も見えない空間で移動する毎日。亮輔は押し揉まれるままにうつむいて・・・母の残した、もう一つの無茶な頼みごとをいまさら思い出していた。

「・・・だからね、夏帆ちゃんも一緒に連れて行ってほしいのよ」

六歳になったばかりの夏帆は、父の妹の娘で、たった一人のいとこだった。能登のじいさんとばあさんを知らないから、亮輔の父と母が夏帆の祖父母の代わりにしていて、亮輔も、実家に戻った時に夏帆がいれば、よく遊んでやっていた。その彼女の荷物が山のようなレトルト食品と一緒に送られてきたのは、母から電話のあった、すぐ後のことだった。来年、小学生になると張りきって、ランドセルを背負う夏帆の写真が、荷物と一緒に入っていた。平均よりも小さな体が、すっかりランドセルに隠れてしまっている。そのランドセルを贈ってくれたのが里子おばさん、夏帆はおばさんにお礼を言いたいのだそうだ。まだ幼い夏帆を連れて行くのはひどく面倒な気がするけど、長い道中の暇つぶしにはなる。そう思うことにして亮輔は、三日前、夏帆のお母さん、千恵子おばさんから届いた夏帆の小さな洋服たちを、自分のキャリーバックの隙間に押し込んでいった。

東京駅に現れた夏帆は、アパートの近所にいる、似たような年頃の男の子とはどこか違って、まなざしがずいぶんはっきりしていた。その横に、前島瑞樹が佇んでいる。結局、母親の頼みを断らなかつた亮輔一行を瑞樹は、東京駅まで見送りに来てくれていた。売店に並び、ペットボトルに入った冷たいお茶を三本買って戻ると、「わたし、じゃまかしらねー」と、夏帆がませた口をきいて、瑞樹の笑いを誘っていた。夏休みの新幹線ホームは、手に土産の袋を下げた大人に交じって、大きなリュックを背負う子供たちであふれ、太陽が熱気をかき回していた。

「気をつけてね。お土産、待てるからね」と動く唇とやわらかな掌に送られて二時間半、新幹線はもう、金沢駅にすべり込み始めていた。昔はもっと長い時間、特急電車で揺られていたはずなのに・・・ちっとも揺れないシートに座ったまま、見慣れない巨大な建造物の中へと吸い込まれていく。帰省客よりも色とりどりの観光客でごった返す金沢からは、ローカル線に乗り換える。夏帆の、少し汗ばんだ小さな手を握りしめて、横にも縦にも広々と造られたコンコースを足早に抜けていく。停車中の三両編成が、いつかの夏の日のように、くすんだ車体をホームに横たえていた。何とか二人分の隙間を見つけて腰を下ろすと、発車のアナウンスが流れて、錆の浮いた車輪がレールの上を動き始める。

街並みを抜けてすぐに見えてきた田園には、変わらない緑の風に潮の香りが漂っている。そして、その上を、夏の陽がさざめいていた。50分ほどで到着する宝達駅からは、さらにのんびりした路線バスに揺られることになる。いつも軽トラックで迎えに来てくれた伯父の笑顔はもう、どこを探しても見つからない。海は見えないのに、大きく息を吸い込むと、潮の匂いが胸いっぱい広がった。日に数本しかない路線バスが、その海風で少し茶色く汚れた車体を震わせながら近づいてきた。

バスが走るアスファルトの真ん中には、融雪機が埋め込まれていて、等間隔に融雪のための水を吐き出す穴がどこまでも続いている。その穴の周りが赤茶色に滲んでいるのは、錆がアスファルトに染み付いてしまっているからだ。冬に訪れたことのない亮輔にとって、この融雪機がどれだけ役に立つものなのか、今ひとつピンとは来なかつた。そして路線バスは、ゆるやかなカーブの頂点を見

つけると、ゆっくり左にウインカーを落とした。

夏の太陽に洗われたような、どこか洗い立ての匂いのする景色の中に降り立ち、真上に広がる夏空に目をやった。細めた瞳にも強烈な光が射し込み、亮輔が「眩しっ」と小さく声を上げると、隣にいた夏帆も真似するように真上を向いて「まぶしっ」と騒ぐ。瞳は固く閉じたままなのが可笑しかった。のびやかな田園の風景には、あの黒く光る瓦を抱いて民家が点在している。夏の青と緑にはそぐわない、ただ、夏のあふれる光によく似合う、その変わらぬ黒の佇まいに亮輔は、なぜかうれしくなっていた。怯えていた小さな亮輔と違い、夏帆には怖くも何ともなく、ただ眩しく映っているだけのようだった。垂れはじめた稲穂を支える葉は、まだまっすぐに青くて、奥の林からはヒグラシの声が聞こえてくる。田んぼの片隅で何か燃やしているのだろうか、薄墨色した煙がまっすぐ細く、空に向かって伸びていた。

二本の砂利の筋が田んぼに寄り添い、くねりくねりと左右に曲がりながら、奥の森へと続いている。山に迷い込んでいくような道には、いつか歩いた記憶が染みついていた。見覚えのある小さな太鼓橋は、初めの石色もわからない、いや何で作られたのかさえもわからないほど苔に覆われて、森の陰に溶けてしまっている。無邪気に騒ぐ夏帆が、「ちゃんとみてる？」と訊いてくるので、「見てるよ」と気のない返事を一つ。「なにみてた？」と矢継ぎ早の夏帆に、「見てたよ」とかみ合わない返事をするとすかさず、「ほら、なにもみてないじゃん！」と口をとがらせた。小川の上にトンボが二匹、絡み合うようにして飛んでいったことが、夏帆にはめずらしかつたらしい。

そうして亮輔と二人、今度はうっそうとした竹林の小径を進んでいく。眩しかった太陽の光も遮られて、足元の土は湿って靴底に張り付きペタッペタッと音が後ろを付いてくる。夏帆は、早く歩いたり遅く歩いたりを繰り返して、その音色を楽しんでいた。行き止まりのように見える垣根を右に折れると、急に明るくなって視界が広がり、懐かしい伯父の家の前に出た。辺りの民家と同じ風情で、黒い瓦が夏の陽を跳ね返している。突然の来訪者を、鶏が騒がしく羽を広げ教えている。タロが死んでから、犬は飼っていないと聞いていたから、こいつがチャイムの代わりらしかった。カン高いその声に、里子おばさんが玄関から飛び

出てきた。じいちゃんもばあちゃんも居なくなったここに、里子お婆さんは、たった一人で住んでいる。もう六年も一人で住んでいることになる。

三

「よう来なさったなあ」。のんびりした声と一緒に褐色の肌が陽射しを宿して光り、そこに白い歯がくっきりと浮かび上がる。亮輔にとってなつかしい笑顔が、横にいる夏帆にも振り向けられた。目元が少し垂れた里子お婆さんに、夏帆が安心したように大きく、「こんにちは！」と声を張り上げた。「さあさあ」と手招きされるまま、二人は土間の上がり框から中へと上がり、右に見えている仏壇へまっすぐ歩いていく。仏壇の両脇には盆飾りの提灯がにぎやかな灯りをくるくると回している。幼い頃に見た提灯はたしか、中でろうそくが燃えていたはずだけれど・・・今では裾から電気コードが延びていた。

何が変わって何が変わらないのか。よくわからないままに亮輔は、手に四本の線香を取り、置いてあったライターで火を付ける。赤々と燃え上がる炎に息を吹きかけようとする夏帆をたしなめ、右手で仰ぎ火を消すと、二本を夏帆に渡してから自分は香炉に線香を立てて、りんを鳴らす。澄んだ金属音が部屋の隅々に響き渡る。「えらいことで・・・ありがとうねえ」とつぶやきながら、亮輔が母から預かった手土産を仏壇に供えると里子お婆さんはまた、土間に下りていった。

そして「まだ、よう冷えとらんかもしれんけどお、切ったけえ、食べて」と、両手いっぱいのお盆に丸ごと西瓜を一個、八つに切り分けただけで運んできた。前掛けのポケットから「食卓塩」と書かれた赤い蓋の瓶を取り出し、お盆の横に並べてくれる。サイダーのマークが記された小さなコップには、香ばしい麦茶がなみなみと注がれている。里子お婆さんは麦茶をまだやかんで沸かして、冷ましてから冷蔵庫に入れているらしかった。喉をこするような濃い褐色を亮輔と夏帆は、麦の香りごとゴクリと一息に飲み干した。

放し飼いにされている鶏が、奇声を上げて庭に駆け込んできた。林の陰で猫

にでも狙われたのだろうが、こっちには猫より厄介なヤツがいるというのに……。バスから降りたときは「つかれた」と亮輔の背中に乗っかっていた夏帆は、西瓜と麦茶ですっかり元気になって、その鶏を追い庭へと下りていった。低く土埃が舞い、時折けたたましく鶏が鳴き声を放つ。庭から納屋の物陰に逃げ込む鶏。今はもう使っていない耕耘機にすっかり土と埃が重なって、伯父の自慢していた真っ赤なボディは茶色にくすんでしまっている。うまく隠れたつもりでも、縁側から眺めている亮輔には真っ白な体が丸見えだ。しかし、夏帆はまったく気づかない。ようやく見つけた鶏に近づく夏帆。すぐに鶏は気がついて、また庭先に逃げ出してくる。いくら追いかけたところで、夏帆に勝ち目はない。いい加減追い回して汗だくになった夏帆が、くたびれた笑顔で縁側に座る亮輔のところに戻ってきた。

四

庭に向いた縁側は、夏帆にも、そして幼い日の亮輔にも、格別の場所だった。足に土埃を付けたままで上がっても怒られることはなかったし、夏は何より涼しかった。黒く光った床が、素足で歩くと足の裏にペタペタと張り付いて、それが何か気持ちよかった。一度、雨あがりの庭で秋田犬のタロと遊び回って、泥だらけの足のまま飛び乗ったときは、さすがに伯父のげんこつを頭にもらったけど、そのときも里子おばさんが間に入ってくれた。見ると屋根の瓦のように光る縁側に小さな足跡がいくつも残っていて、幼い亮輔の心にこびりついていて、それを里子おばさんは、固く絞った雑巾を持ってきて、さっとひと撫でて元に戻すと、何もなかったことにしてくれた。

縁側に寝転ぶ亮輔の小さな頬には、いつも木目がきれいに写し取られて、それを見て里子おばさんは、よく笑ってくれた。笑いながら、「亮ちゃん、ほれ、食べて」と、さっき、ちゃぶ台に並べてくれたのと同じように、井戸水で冷やした西瓜を運んできてくれた。赤い蓋の食塩の瓶も必ず一緒に置いてくれたけど、小さな亮輔には西瓜が甘くなくなってしまうような、そんな気がして、一度も蓋を開いたことが無かった。塩をかけなくても、義広おじさんと里子おばさんが手塩にかけて育てた西瓜は、十分すぎるくらい甘くて瑞々しかった。

オレンジ色が辺りに満ちてくると、縁側から奥の部屋へと光が延びていく。そして、土間の奥から、いろんな音と匂いが交差してやって来る。炊飯器の蓋は蒸気をはらみ、噴き出しながらカタカタと忙しく踊り、それと調子を合わせるようにして包丁がまな板を叩いていく。フライパンにたらした醤油の、熱くて香ばしい匂いに亮輔の腹の虫が鳴き出し、縁側から外へとこぼれていった。小さな寝息を立てる夏帆の横に寝転ぶと亮輔は、自分も夏帆のように小さくなっていくような気がした。やはり塩をかけないで、八分の一をぺろりと平らげた夏帆。横になった小さなブラウスのお腹のところが、まあく出っ張っていた。

幼い亮輔には広く感じた縁側も、今では両手を広げれば、端と端に手が届いてしまう。少しさみしいような変な気持ちになるけれど、肌に伝わる感触は、記憶の中にある心地のままだった。畳とも、もちろんカーペットや絨毯敷きとも違って、T シャツの腕にひんやりと吸い付くように木肌の感触が伝わってくる。亮輔の住む 1DK の狭いアパートでは、なかなかできないことだった。光の方向を見誤ったのか、天井に渡された黒い梁に思いきりぶつかって、固い音と一緒にカブトムシが一匹、縁側に落ちてきた。ガリガリとその爪で木目をひっかくように動くカブトムシが、いったいどこにいるのかわからないほど、縁側の茶色の中、見事に隠れてみせていた。

アパートのフローリングのように平らかではなく、ところどころにある「節」と、その周りに細長く描かれる木目が凸凹で、ゼンマイ式のおもちゃの車を走らせるとまっすぐ走らなくて、子供の頃、それが気に入らなかった。それでも夕暮れ、日陰になったこの縁側にピタリと頬をつけると、聞こえてくるヒグラシの声とひんやりつるりとした肌触りがとても気持ち良くて、いつしか眠ってしまっていた。そう、今、隣で寝ている夏帆のように。もう一度目を閉じて、節から延びた細い木目を、人さし指の腹でなぞってみる。ゆらゆらと揺れながら一筋を描く木目を、何度も何度もたどっていくと、まるで何かの生き物の背を撫でていているようだった。いくらこするように指を撫でつけても、汚れはもちろん土埃も指には付いてこなかった。このままコロコロと転がっていたらきっと、自分に付いた汚れもきれいにふき取ってくれるような、そんな気持ちになる。ゆっくり息を吐いて、大きく息を吸い込んでみる。幼いころに嗅いだ、義広おじさんの家の匂いがした。

五

ちょっぴり甘いような、それが掃除用のワックスの匂いだと知ったのは、ずいぶん大人になってからだった。「これをかけておけば、汚れもすぐに取り除いてしまうし、少しばかり雨が吹き込んでも浸み込まんからねえ」と、里子お婆さんはいつもうれしそうだった。ちゃぶ台に夏休みの「ドリル」を広げ、鉛筆を走らせた先で里子お婆さんが、四つん這いになって縁側を拭き上げている。その背の上を蚊取り線香の煙がゆらゆらと漂い、消えていく。使い古したタオルを雑巾にして、「あまり多くつけねえことだ」と、ボトルから木の床にさっと白濁した液体をまいたかと思うと、手早く伸ばしていく。

川のせせらぎ、海の声、木々の緑に、はじける光。ここに居ると、何かはがれていって元の自分、昔の白い自分に戻っていくような気がした。伯父の家から通りをはさんだ反対側にある、ひなびた公民館。お盆の近くにはきまって子供向けの映画が上映されて、近所の子供に交じって帰省中の子供たちが、こぞって集まってきた。伯父の家のように庭に面した長い縁側が、子供たちにとっての玄関になる。淡い栗色の床は、表面がきれいに整えられていて、光は平たく走っていた。ただ、足の裏に張り付く板の感触は、やはり冷たくて気持ちが悪かった。

伯父も亮輔の父もまだ若く、平気で裏山に分け入り、カブトムシやクワガタや、時に大きなアオダイショウの首根っこをつかんで、得意気に帰ってくるのだった。その二人の顔を見るのが、亮輔は大好きだった。二人を待つのは、きまって村の外れの神社の中。裏山の入り口にたたずむ古い社は、高い杉の木で覆われていて、苔むした境内は、とても涼しかった。社の縁側に横になっていると、たまに寝入ってしまって・・・二人が戻ってきたことに気がつかないこともあった。亮輔の知る故郷は、何処へ行っても心地よい肌触りに包まれていた。

軒に吊るされた風鈴が音を立て、風が家の中へ通っていく。チリリンと短く乾いた音が、うっすらと波の匂いをはらんだ夜に響いた。ゆっくりと目を開けると、夏

帆の顔が亮輔のすぐ目の前にあった。少し眠ってしまったらしい。夏帆は開いた口元からよだれを垂らして、小さな染みを作っていた。仰向けになり左手で頬に触れてみると、板の木目がすっかり写し取られて、凸凹が縦縞のようにやわらかく刻まれていた。頬に当てていた指をまた、板の上に戻して触っていくと、固いけれど同じような凸凹を指の腹がなぞっていく。気づけば胸から膝まで、淡い水色のタオルケットがかけられていた。まるであの頃のように。

来年の夏もまたここに来たい。鈴音に耳をすませながら亮輔は、ふとそう思った。できれば瑞樹と一緒に来たいと。そして瑞樹はきっと、この「縁側」を気に入ってくれる。亮輔には、そう思えた。ふと見た夏帆の横顔は涼やかで、どこか瑞樹に似ていた。